

惟中の上阪と西鶴

(一)

井原西鶴と岡西惟中とは、ともに西山宗因の膝下大阪にあって、延宝期俳壇における新風運動の立役者であった。

摂津の西鶴・備前の摺鉢(注・惟中をさす)弟子兄弟は、おもてうらなきば、され句の大將、延宝七年冬刊、『熊坂(史話俳談)所収』著者維舟は、大阪談林については「中に取てもたがありしぞ。」という間に答えて、特にこの二人だけを並べ挙げている。

じじつ、いわゆる談林俳諧の発生地であり、その中心地であった大阪俳壇において、二人の活動力が群をぬいていたことは、延宝期における二人の出版俳書の数が端的に示しているであろう。

いま今榮藏氏の御調査に従えば、大阪およびこの地の息が特に濃厚にかかって成った地方俳人の撰著も含めて、大阪圏のこの期十年間における俳書板行数の様態はつきのごとくである。(注1)

延宝	二	三	四	五	六	七	八	九	天和	計
4	1	6	8	5	14	18	18	11	5	90

図式的にいえば、寛文末年までの京都俳壇を本拠とした貞門流と、いわゆる天和調時代を経て真享・元祿の江戸俳壇を中心とする蕉風の間にある、その橋渡しとしての過途的時代を担った宗因流(いわゆる談林俳諧)が、その本拠たる大阪俳壇において、延宝後

米谷 巖

半六・七・八年を頂点とし、その旗印宗因の死(天和二年三月廿八日)とともに崩壊する動向がうかがえよう。

こころみに右の数字のうち、西鶴・惟中および兩人の師宗因の撰著、准自撰、有力な共撰とみられる板行俳書数を並べ掲げてみる。

宗因	2	1	2	1	1	1	1	1	1	7
西鶴	2	1	1	1	1	4	5	1	1	16
惟中	2	1	1	1	2	3	4	1	1	14
延宝	二	三	四	五	六	七	八	九	天和	計

(註、板行年については推定に拠るものを含む。今氏はむろん書名を示しておられないので、氏の数字に含まれているはずの右三人の年次別板行数には、私の数え方と一致しないものがあるかもしれないが、だいたいの動向を比べ見るには支障はないであろう。) なお、ちなみに今氏の表から、私の示した右三人の数字をさし引いて、大阪圏全俳人の中からこの三人のそれを除いた板行状況を示せば、つぎのようになる。

延宝	二	三	四	五	六	七	八	九	天和	計
0	0	3	4	2	8	10	13	9	4	53

談林期大阪俳壇に占める三人の比重の大きさ、なかならず宗因門下の中における西鶴、惟中兩人の果たした役割の大きさがうかがえ

よう。

たとえば『吾仙大匠』(延宝元年刊)(三十六人)・『大阪独吟集』(同三年刊)(九人)・『古今俳諧師手鑑』(同四年刊)(内、大阪作家五十七人)・『難波雀』(同七年刊)(十八人)・『俳諧三ヶ津歌仙』(天和二年刊)(内、大阪作家十三人)などの書によって、この期に大阪俳壇で活躍した有力作家とみられる者の中から、その板行書数においてこの兩人に比肩しうる作家を発見することはできない。

たとえば、大阪宗因流集團の初期の作風と宗因の嗜好をよく示している『大阪独吟集』に名をつらわぬ九名のうち、その生涯に板行撰著をもったと判る者わずかに重安、幾音、由平の三名で、しかも各一ないし二書(由平)にすぎない。

その他、この十年間に比較的多くの撰著(共著を含む)を上梓した者で、わずかに旨愨(四書か)、菴翁(以仙)(三か)・遠舟(三か)・保友(二か)・一礼(二)といった微々たる数にすぎず、とうてい西鶴・惟中の敵ではなかったといつてよい。

なお、宗因門でも特に西鶴系の輩後の西園が、地方俳壇にあって、延宝六―八年の間によく五書を板行して、新風への傾倒ぶりを示しているのは注目される。

ところで宗因のそれが兩人の半数しかないことについては、惟中のつぎの説明によって納得できる。すなわち、

○あまたのとし狂句はいかになれて、そのうち一句も一卷もみづから撰び世にひろめ給ふころもなし。たまさかの一句を

も、板におこしてうりありくとて、とうどいやがらせられるれど、口から出た句を人のきよつたへて、むしやうに開板せしむ

る也。(延宝三年刊『しぶ団返答』・俳書双刊)

○是ほど俳諧盛なれども、何集と名付て一集の建立もなく、何の書として一巻のものをも開板せず。多くの俳諧の発句もみづから書とめても置せられず、只時にあたり興によりてつぶやき給ふ事殊勝の事也。(延宝八年刊『破邪顯正返答』・俳書大系)

じじつ、宗因の作品集は序跋もなく、また、たとえば『宗因千句』・『宗因五百句』・『宗因七百韻』・『山宗因後五百韻』などの書名からも察せられるように、須原博士がすでに述べておられるごとく、宗因の人氣に乗じてかかって「書肆などの手で纏めたにすぎないものであ」(俳諧史の研究295頁)ったと思われる。(注2)あくまで連歌師をもって任じた宗因(注3)としては、俳書のみづから上梓するなど、いさぎよしとせぬのは当然であった。

このように西鶴と惟中の著作を合わせれば大阪俳壇全体の優に三分の一を占めることは、二人が延宝期大阪俳壇における新風運動の推進者として決定的な存在であったことをもの語っているとみても誤りではなからう。

しかもこのことは、ただ大阪俳壇の内部においてそうであるばかりでなく、京都俳壇における旧派の季吟(六―九書か)、重頼(雜舟)(七)、新風側の高政(六か)、常短(四)、江戸俳壇における松意(八)、言水(五)、信徳(五)、芭蕉(四か)幽山(三)、似春(二か)などに比べても、この期の全俳壇を通じて、もっとも精力的に表だつた活動をしたことがわかる。

ちなみに、二人の板行書名を掲げておく。

七	<p>○六月興行 秋刊 ○十月刊 夏刊 ○四月八日興行 ○五月廿五日興行 この年刊カ</p> <p>生玉万句 哥仙 俳諧師</p>	元宝延	西	鶴	中
六	<p>○三月興行 ○八月興行 ○秋興行 ○十一月一日刊 この年カ</p> <p>俳諧胸ぼね(西国・由平と) 西海撰「大観」(西鶴序) 俳諧虎溪の橋(菘宿松意らと) 俳諧物種集新附合 博多百合(伝本ナシ)</p>	元宝延	西	鶴	中
五	<p>○正月廿一日興行 二月下旬刊 ○三月六日興行 ○四月十四日興行 五月刊 ○十月八日興行 ○十月廿五日刊 この年カ</p> <p>俳諧四吟六日飛脚 西鶴五百韻 両吟一日千句(友雪と) 飛梅千句 杉やき(伝本ナシ)</p>	元宝延	西	鶴	中
四	<p>○三月刊 ○八月刊 ○十一月刊 この年刊</p> <p>俳諧三都抄</p>	元宝延	西	鶴	中
三	<p>○四月刊 ○九月刊 この年刊</p> <p>俳諧蒙求 返答 西山梅翁判十百韻</p>	元宝延	西	鶴	中
二	<p>○正月廿五日刊 ○八月刊 ○十一月刊 この年刊</p> <p>俳諧三都抄</p>	元宝延	西	鶴	中
一	<p>○正月廿五日刊 ○八月刊 ○十一月刊 この年刊</p> <p>俳諧三都抄</p>	元宝延	西	鶴	中

(一)

この間に、西鶴が三十二ないし四十一才、惟中が三才の年長で三十五から四十四才、そして師の宗因はすでに六十九ないし七十八才であったことと、兩人のこのような奮闘ふりとを思い合わせてみれば、各々大きな野心とそれを逞げける自己を胸にしなから、そしてそのことをたがい意識しながら、競いあったであらうことは想像にかたくない。

じじつ、一方の惟中は延宝六年春、備前岡山から地の利を得た本拠大阪へ居を移してくるが、そのさい「梶翁師の事大老になられしにより、此道の事ハ跡目にたのまれて大阪へまかる」と偽り蝕れて「備前を出し事」、しかもそのことが「備州の人」からいち早く、大阪へ手紙で伝えられていたことが『俳諧前海月』
破那頭正返答之評判 (証宝八年四月刊)
同返答自註之再評
の著者によって暴露されている。

本書は周知のとおり「難波津散人」と名のる匿名氏の著わした惟中の論書への駁撃であるが、同じ大阪の地に住み、また文中の言句からそれが誰であるかは当

八		<p>○二月刊 俳諧破邪頭正返答</p> <p>○三月下旬刊 破邪頭正評判之返答</p> <p>○前年十一月跋 この年三月四月刊カ 近来俳諧風昧抄</p> <p>○八月刊 続無名抄</p>
九 (天和元)	<p>(正月刊カ 難波の貞ハ伊勢の白粉)</p> <p>○前年五月七八日興行 西鶴大矢数</p> <p>本年四月刊</p>	<p>○八月廿四日興行ほか 一夜庵建立縁起</p> <p>(十一月序 枕草子旁註)</p>
二	<p>○正月十一日序 俳諧百人一句難波色紙</p> <p>(西鶴作・睿林編)</p> <p>△三月廿八日、西山宗因没、78才V</p> <p>(註、西鶴著作については「西鶴年譜考証」参照)</p>	

然惟中に判然したはずであるし、しかも備州からの「其文得たる人」から「直の物かたり聞待りたり」と、資料入手の経路を明らかにして、惟中その人へ直接宛てて難じていることからみて、第三者向けに故意に捏造したうわさの類でしかなかったとは思えない。

これより二年後のことではあるが、惟中が延宝八年の京都歳旦に、「西山梅翁跡目」と肩書した発句を送って物議をかもしたことについては、顯原・野間両先生も言及しておられるところであるが(注4)、『俳諧さるとりもち』(八年三月刊)の著者が「汝は大坂にて宗因迹(アトメ)とて、所せきさまして、外の宗匠をあざけりふみつけて、鼻をたかばるよし風聞す。」といっていることかからみて、ひとりこの京都へ送った歳旦句の一件にかぎらず、すでにそれ以前から大坂俳壇の中で口に出して言っていたものと推測され

るところ。

ところで延宝六年五月十二日の夜(注5)道修町西(『難波雀』)(注6)の新居で、惟中が大阪転居後さいしよの月次会を興行していることは周知のとおりである。(『太郎五百韻』)

つどうもの梅翁以下益翁、由平、西鶴、如見、幾音、旨恕、貞因で、宗因門の一流メンバーがそろっている。

二年後になって『備前海月』の著者が暴露しているときニュースは、当時はたしていつ頃どの範圍に伝わっていたであろうか。

同年三月の日付けをもつ任口序のある両吟百韻は同じ春季の作品が『太郎五百韻』に収められているので、そのころにはすでに上阪していたはずであるから、その時から五月十二日の初会興行の日までには日時もかなりあるし、大きな関心と呼ぶ話題だけに、すでに大阪へ通報され、当夜の参会者の中にも耳にしている者があったものと推測してもむりはないであろう。

もし一座の中に知った者があったとすれば、『備前海月』の著者が西鶴配下の人と想像される(注7)だけに、西鶴などいちばんにその中に数えられて然るべきかと思う。

今氏は、「この俳壇では、誰と誰とが反目し合って交わりを持たぬという事実を指摘することが不可能である。」とされ、「この俳壇がいかに渾然一体の親密さをもって組織されていたか」、その一

例としてこの惟中宅月次初会に、この地最高のメンバーが一堂に会したことをあげておられる。(注8)

なるほど大阪俳壇は、京都俳壇のごとく貞門の保守勢力が根強く支配体制を固めていた地とちがい、したがって延宝の談林化も比較的抵抗少なく浸透していったし、また同門内部においても宗因のひざもとだけに、かれを中心に比較的よくまとまって動いてきたのは事実で、たしかに「反目の余り交わりを」絶つというほど、京都俳壇におけるごとき露骨な派閥抗争はみられなかった。

しかし、新風運動の高調期に、まんまんたる野心を抱いて乗り込んできた新入りの惟中と、これを迎えた西鶴によって代表される在来の大阪新風俳人との間には、その後強い悪感情が底流していたことは、さきに引いた『さるとりもち』のことばや、『破邪顛正返答之評判』『備前海月』『俳諧太平記』などによっても歴然と判ることである。

惟中宅初会に一流メンバーが揃ったことは事実であるが、少くも主催者惟中に対して、参集したすべての人が渾然一体の親密感情から参席したものであるかどうかは疑わしいと思われる。

惟中の招いたメンバーの選び方に、たんに自分に親しい者というばかりでなく、ある種の配慮があつたろうことは予想されるところであり、招かれる方また特に初会であるという義理ずくの事情が働いてこの結果となつたものと推測できぬことではない。

ともあれ、惟中の「跡目にたのまれて」云々のニュースを宗因は知ってか知らずか、ちやうどこの前後に京都の高政宅に招かれて贈つた(『破邪顛正』・『同返答』)。

末茂れ守武流の惣本寺

の著名な雑句を思い出させる

あしからじとて杜茂れ難波の住

という雑句を詠んで、如才なく惟中の大阪での門出を祝している。

惟中またこれを受けて

おさし凶次第に作る鴨の巣

とあいさつしている。

「おさし凶次第に作る」とは、いちおう謙虚な「お願ひします」とのあいさつと受けとれるが、同時に師の志を継ぐ者、「跡目」としての自負を秘めた口吻と感ずるのは、やや思ひすこしであろうか。

ところで惟中は、上阪の年の正月上旬の日付けをもつ落下の白痴道人(任口か)の序を贈えた『一時軒独吟三百韻』を大阪の深江屋から板行しており、これは上阪にさいしてのいわば名刺がわりに用意したものかと思われるが、上阪の翌年正月、さらに『太郎五百韻』、つづいてその下巻ともいふべき『次郎五百韻』を板行した。

この後の二書は、いうまでもなく上阪して以後その年の暮れに到る間に主として京阪の諸家と巻いた作品集である。(日付けのない作品もあるが、すべて同年中のものと思われる。)(注9)

爰もにすゝみ出たる俳諧師を、いかなるものとかおもふらん。荒木田句帖の後風緋翁法しの嬌々、なにがしの好ものら(中略)当風のまん中とり、さしつめ引つめ散々に付ちらしたる云々

という「浪花城下春翁」の序を附して(次郎五百韻)、上阪の翌春早々に板行したことは、大阪俳壇への転入者としてのあいさつ状というべく、同時にそこに惟中の着実な俳壇への布石ぶりを見てとる

ことができる。

惟中にとって記念すべき本書に、本人になり代つての俳壇へのあ
いさつ状ともいうべき序文の篋をとつた「春翁」とは誰であらう
か。本書上梓の意図から察して、大阪俳壇の未鑿では意味がないで
あらう。しかし長老格の名とすれば、その名が「古今俳諧師手鑑」
その他の俳書に全く見あたらずぬのは不可解である。察するに、何か
の都合で、この序のためにのみ用いた仮の名ではなからうか。

惟中としては、誰よりも宗因その人にこそこの序を貰いたかつた
ところであらうが、序文の文面からみて宗因でないことはいうま
もない。いったい宗因は、惟中の著作に限らず、俳書のために序、
跋の筆をとつたことはなかつた。(注10)

本書に顔を見せている連衆の中の長老格としては、梅翁を除けば
「春翁」と名前の一見似ている「菰翁」(以仙)がある。(太郎次
郎阿曾あわせて惟中一座の九席の興行のうち、月次初会はじめ三席
に出座、いずれも亭主、主客に次いで第三または第四句をつとめて
いる。)この菰翁は宗因と同年で、宗因と親しく、『大椽』(延宝
六年刊)か、『大坂八百韻』(同八年刊)の宗因流俳書をも刊行し
ており、貞門以来の大阪俳人の中では、新風に熱心な古老作家であ
る。(注11)その上、本書ばかりでなく惟中の『近來俳諧風昧抄』
に菰翁と阿曾や三吟を興行していることもみえており、惟中が親し
く願っていた俳壇の大先盟であつたことがわかる。

序文の「春翁」その人に擬すべき人としては、菰翁はかなり条件
をみたす人にはちがいないが、なお明確な証拠がなく、いまのこ
ろ不明とするほかない。(注12)

ただ、この序文の著者を明きらかにすることは、それがもし匿名

であるならばなおのこと、なぜ本名をかくしたかということから
んで、惟中を迎え入れた大阪俳壇内部の親疎その他の関係事情を探
る一つの手がかりとなるであらうことが予想される。

いったい惟中は、いうまでもなく無名の新人として大阪入りをし
たのではなかつた。

すでに延宝三年『俳諧蒙求』(四月成)『しぶ団返答』(九月
成)の論書を出して、宗因の代弁者然と寓言託による新風の理論づ
けをおこない、翌四年には『岳西惟中吟』(西山翁梅判)の独吟集を宗因の
賛辞で飾つて、実作の面からその存在を誇示し、翌五年には『俳諧
三部抄』を編み、さらに翌六年春には上阪土産ともいうべき『一時
軒独吟三百韻』と、岡山に住みながらいずれも大阪の深江屋からつ
づけざまに板行してきた俳壇周知の俳士であつた。

惟中は、「俳諧の事余十四五歳の比よりもつぶやき習ひ、それよ
り廿五六年」(延宝七年十一月跋『近來俳諧風昧抄』上)とみずから
語っている。その言を信すれば、たとえば延宝元年をさかのぼるこ
と二十年、承応二、三年の頃にこの道を習いはじめたこととなる。
(周知のように西鶴も同じ頃、延宝八年五月興行の『大矢数』の自
跋で、「予俳諧正風初道に入て二十五年」と語っており、逆算すれ
ば惟中におくられること二、三年の明暦二年、やはり十五の年に俳道
に入ったこととなる。)

『三部抄』(同五年刊)に「午のとし立春」云々と詞書した、寛
文六年初春の句と思われるものがあるが、やはり当時のこととて、
貞門調の句というべきであらう。(ちなみに西鶴句の初出は、寛文
六年刊『遠近集』である。)

そして、宗因に師事するようになったのは、寛文九、十年の頃

で、九年四月小倉に下向、翌年十月帰阪した宗因西下の旅の途次であるといわれている。(注18) (ちなみに、西鶴が宗因に入門したのも、やはり惟中と同じ頃「恐らく宗因が九州から帰阪した寛文十二年頃のこと」(注14)といわれる)

ともあれ宗因個人の俳風が俳壇の人氣、関心を集め、それに伴いその周辺に宗因園といったグループが、大阪俳壇の中に自然発生的に醸成されてきつあつた寛文末年の頃から、延宝の初年にかけて急速に宗因に接近していったことは、まちがいのないところであろう。

延宝三年九月序『しぶ団返答』の中で、

やつがれは、所こそ海山を隔(ヘダテ)たれ、よう老師の心術を存じぬ。上京をするたび、五日も十日も親炙して、よろづものゝならひをも承り、たうとき師とおもひ、なに波のかたをばあともせぬ事なり。

と語っているが、同五年十一月刊の『三部抄』に、それ以前に宗因と同座したことを示す句が、季節をちがえて合計五席分みえることによつても、このことはうなずける。

なお、比較的しばしば上阪または上京の機会を得て、ただに宗因の門をたいたばかりではなく、『三部抄』によれば、しばしば秋也(延宝四年四月没)、保友、京の任口・維舟らと興行している。

そこで注目すべきは、これらの人々はいずれも、宗因の門弟というべきではなく、宗因をかこむ俳友と呼ぶべき間柄の作家で、比較的自由な雰囲気をもった貞門以来の最長老俳人であったといふことである。じつさいに新風を運動として推進した西鶴を代表者とする大坂宗因園の若い世代、由平、幾音、遠舟、一礼などのグループと積極

的に交わりを結んだという形跡は、故窓か偶然か『三部抄』からは見出すことができない。

かくして惟中は、上阪するまで、宗因を中心として、それをかこむ俳壇の長老格の人々との交わりを通じて、熱心、貞禁に新風の骨法を探り、摂取することにとめていたのであった。

野間先生は、延宝三年四月刊の『俳諧探求』の一節に、すでに「守武没してのち西山の翁その伝をつぐ。翁没してたれか是をつがん。」と書きつけていることをあげて、早く岡山時代から心中ひそかにその後継者に自分を擬す自負が萌していたにちがひなく、上阪もその年来の野望実現のための準備であつたらうと推定しておられる(注15)、うなずける御見解と思う。

すなわち惟中が、新風運動の第一線に立っていたと思われるじぶんと同世代の若手グループとは必ずしも積極的に交わりを求めず、長老連との交際を選んで求めていたらしいことと、後年かれが鼻にかけた「此正道は学文して……ものこそ、この道の正統を伝ふともいふべし。」(破邪頭正返答)という自負から、他をのしるに口癖とした「すゑん、文盲不智の輩、梅翁のながれ也とのよしり、手爾葉もしらぬあふれもの、朗詠集歌仙もおぼえぬばかもの、文字かなつかひもわかまへぬ気がさもの。」(阿智)といった思想と同じものが、すでに延宝三年の『俳諧探求』『しぶ団返答』にみえること、すなわち「……これ俳諧師の学文せぬ故也。(中略)哥も運歌も俳諧も、才智なく文盲にして、なんぞ堪能の名をも得、上手とも人によべれんや。」(蒙求)「難書を見れば学問もなまうなれども」(返答)とあることを思いあわせてみると、いっそう納得できよう。かくして、俳壇の長老連との親交、あいつく著作の上梓といった

ことを背景として、惟中としては数年がかりで内外ともに充分な準備をととのえた体勢のもとに、大阪俳壇への移居を執行したのであった。

(三)

こうした惟中の上阪移居に対して、当然西鶴が無関心でおられるはずがなかったことは、既述のようにその月次初会に招かれるままに、一味の同志由平、幾音、旨怒らと出席していることが、すでにそれを証明しているといつてよい。

翌年のことではあるが、西園撰『見花数寄』（延宝七年四月刊）巻頭西園、西鶴両吟百韻の発句、脇で、「さくら花阿蘭陀流とは何を以」（西園）「日本に梅翁其枝の梅」（西鶴）と宗因の嫡流たることを誦い、翌八年五月興行『大矢数』（九年四月刊）の巻四自跋で、「慥て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし己来也。」と誇称した西鶴が、既述「宗因跡目」云々の言辭を耳にして、上述のごとき惟中の上阪を、有能な同志の加入として素直に氣を許して歓迎できようはずのないことは、充分予想されるところである。（注19）

惟中の上阪に対する西鶴の反応を、端的に示したのが、『太郎五百韻』所収の惟中との両吟百韻二巻である。（惟中上阪の年の秋の興行と推定される。（注17））

この両吟作品に加えられている惟中の序文は注目されるものであるが、それはつぎのとおりである。

爰に入道あり、西鶴と名のる。ある日余に会し、秋の発句十な
らべ、千句の両吟せん事をぞむ。されどもさきハる事ありてや

ミぬ。さりとして僕が瓦礫の句はなげはふらんもいたましからねど、かの入道が金玉の詞をいたづらにくたさむ口惜しくて、梓にちりばめぬ。のち見ん人の目利にのせて、彼むかしからつたハれるへちまのかハのだんぶくろに納めんものならし。

右によれば、西鶴の方から惟中に両吟秋千句の興行を申し込んだのであった。

いったい惟中は、西鶴より三才の年長であり、俳書板行歴においても西鶴に負けない実績を持ち、儒医を業としただけあって、その自慢のごとく「学問も」ありそいな男であったし、かれがひけらかすごとく宗因にも極力親しんでいた相当の実力者であったのは確かであるが、西鶴がそうした惟中に対して素直に心からの敬意を払っていたとは想像しにくいから（むしろ、既述のごとく年令といい、俳歴といい、自負心といい、そうしたほ自分とあい似た条件をもつ惟中であつたればこそ、かえって激しいライバル意識をいやでもかきたてられずにはおかなかつたと思われる）、この両吟千句の所望は、もじどおり西鶴の惟中に対する挑戦といふべきものであつたと推測される。

同じ地に居を移してきた熱心な同派の実力者に、友愛または兄事するといった気持ちから出た所望であつたとは思えない。

たとえば、この翌年四月、友雪が先盟の「大矢数の作者西鶴にのぞんで」序巻いた『両吟一日千句』などのばあいは、所望の気持ち、動機がちがっていると思われる。

その序で友雪は、先盟西鶴を「一をしに押しじかんとおもひ侍れども、もとより小腕わづかの力草の種とするものか。」と告白し、西鶴またその跋で「友雪此道にこころざしふかく、有時両吟のぞ

み、一日の春の名残、十握紙のうらまで手をひかれて、やういふ半分道進、付物ならし。」と、あきらかに後進に花をもたせた言い方をしている。(注18)

友雪は、いったんは「一をしに押しじかんと」氣負つてはみても、所詮あゝ手は大矢数の第一人者西鶴だということを許し認めたとでの両吟所望であり興行であつた。

千句といへば、従来ふつうのやりかたでは三日は要するかなりの大興行である。西鶴のばあい、それは同じ地同志を迎えた友愛の深さを示すものであるどころか、以前からとかくかんにさわる言動に當むこの男が、同じ地に乗りこんできて、いやでもいっそう目ざわりな存在となつたことに対して、彼の得意とするやゝ物量戦的方式での対決を迫つたものとみるべきであらう。

しかし、この興味深い両雄の対決は、まತ್ತとうされないうで途中で挫折した。惟中の序に「さへる事ありてやみぬ。」とあるとおり、『太郎五百韻』には二百韻しか収められていない。じつさいに作られたのも二百韻であつたものとみなしてよいであらう。「鬼野馬(おにのうま)とぶや秋津洲千句物」、「句躰も秋も千里同風」と、そのつもりで始められはしたが、わずかに二百韻で中絶した理由、すなわち惟中のいう「さへる事」とは具体的にいかなることであつたか。

このことについて野間先生は、「惟中の口吻から判ずると、中絶の原因は全く惟中の側にあつたものと思はれる。」として、「恐らく西鶴の連吟に、さすがの惟中も追隨することが出来なかつたのであらう。」と推測しておられる。(注19) その根拠として惟中の

『近來俳諧風抄』(延宝七年十一月序)に

近年俳道の盛なるに任て、千句万句など名付、早口の俳諧を

好む事、誠に何の味ひもなき事也。句は沈思して、一句にても心をとめてしだすこそ面白けれ。

とみえることをあげておられる。思うに、中絶の直接原因は、あるいはそうした文学上の問題とは関係のない、たとへば病氣だとかいった事情によるかもしれないが、両吟で千句といふかなりな大作を成就するには、おそらくがいの作風に共鳴しあうところがなくては果せまい、ということも考えられる。

西鶴からいどみかかり、中絶しておつたこの手合わせで、二人はおたがいの作風のちがいを、はつきりと認め自覚しあつたにちがいない。

そして、その認めあつたがいは、おもに「口拍子」のちがいにあつたであらうことも、当時の西鶴および俳壇の状況から察せられるところである。

「口拍子にまかせ一夜一日の内」に、『大句数』千六百句独吟を興行して、いわゆる「矢数俳諧」なるものを延宝末年の俳壇に流行させる端緒を西鶴が開いたのは、すでに前年の五月のことであつた。

『仙合大句数』(延宝七年三月刊)の序文で西鶴は「中々高政などの口拍子にては大俳諧は及ぶ事にてあらず」と述べているが、速い口拍子にじぶんの俳風の大きな特質を自覚し、じぶんの創始した矢数俳諧に対する俳壇の人氣をみて、いよいよ自負するところがあつた時である。

また、いわゆる矢数俳諧ばかりでなく、三日かかるのをふつうとする千句を一日で巻きあげ、そのことを誇示することが流行したのも

この前後、ことに七、八年の頃であった。(注20) なお、西鶴はこれに ついてもすでに延宝三年四月三日、娶の追善に「明るより暮るまで に」(序)、『独吟一日千句』を興行、まもなくこれを上梓して先鞭 をつけている。

惟中との両吟秋千句が成就できなかった翌年四月十四日、友雪に 望まれてではあるが西鶴が『兩吟一日千句』(同年五月刊)を興行 したことはすでに触れたが、こうしたことから思いあわせてみれば、西鶴が惟中に「秋の発句十ならべ、千句の両吟せん事をのぞ」 んださいも、あるいは「兩吟一日秋千句」の成就を希望したのかも しれないという想像も必ずしも不自然ではないであらう。

惟中はやはり『風牀抄』の中で、

此ころハ、やゝもすれば多人数の席に一句を沈思する事ハな く、我がちに句をいひちらし、早くちを好み、ふたゝび懐紙を みる事もなき体、誠に放埒の事也。

と、さきにおげた本書の文章と同趣旨のことを説いているが、西鶴 によつて起こされ、西鶴によつておし進められてきた「此ころ」流 行の「早くち」俳諧に、惟中が賛成できなかったことは明らかであ る。

そして、それは理念上賛成できなかったというばかりでなく、じ つさいの作風においても、惟中はその点では西鶴とはあい反する作 家であつたと推定される。

かれは、貞門系の無名氏『俳諧綾巻 破邪頭正并 返答阿毘 四月刊』の著者に、

され共俳諧は下手さう也。宗因流はかる口なるこそよけれ。

かの皮肉の百韻を見れば、句牀おもくしくて、千ノ菊が道戯

を聞やう也。(俳諧大系)

と、評されている。

惟中の俳風に対するこの評が真をついているとすれば、「かる口 の句作、そしらは群れいわんざくれ。」(延宝元年興行『生玉万句』 序)と、「軽口」をこそ新風の骨法として宣言し、「軽口にまかせて なげよほととぎす」(大阪独吟集)とばかり推し進めてきた西鶴 の、ひいてはすなわち宗因流の本質(注21)にそむくものといわ ねばならない。

「軽口」即「早口」ではないことひろんであるが(注22)、す で にたとえは『蛙井集』(寛文十一年自撰)に

今の世の俳諧をもてあそべるハ(中略)そのわきまへもなく脇 より指出て、なんじ句の付心を思索して遅ければもどかしさふ に遅吟なりといひ(中略)口に出るにまかせて

(三句略)

などいひ、是こそ誰の流、軽口なりと、童戯をもととして句を がざり、付心に相違する事おほし。

とあるごとく、「軽口」が即興性に立脚していることから、それは 時間的には「早口」に結びつく本質のものである。西鶴が「かる口 の句作」と誇示した『生玉万句』が、わずか「十二日にしてこと早 れり」(序)といふこと自体が、このことを証明していよう。

「句牀おもくしくし」き惟中と、「早口の俳諧」に意欲を燃やして いた頃の「かる口の句作」作家西鶴との「兩吟秋(一日?)千句」 興行が、中途にして蹉跌しなければならなかったのは、けだし当然 であつた。

(注1) 談林俳諧史(明治書院刊『俳句講座1・俳諧史』127頁)

(注2) 注1、125頁にも同見解が述べられている。

(注3) 野間光辰先生「連歌師宗因」(国語国文・昭和28年9月号所載)参照。

(注4) 『俳諧史論考』97頁、「俳諧太平記」(国語と国文学・昭和24年11月号)

(注5) 延宝六年十一月刊、西鶴編『物種集』天理図書館蔵本の表紙見返しに掲げる「大坂中俳諧月次日」(定本西鶴全集第十巻所収)によれば、当日惟中宅での月次会は夜会であつたはずである。

(注6) 文政八年刊『消閑雜記』跋文には「高麗橋辺にト居し」とあり、天保九年刊『俳家大系図』にも「浪花高麗橋ノ側ニト居ス」とあるが、延宝七年刊の『難波雀』『難波鶴』の記す「道修町西」と、結局は同じ所を指しているものと思ふ。なお惟中が道修町に住んでいたことは『備前海月』の中に「道修町あたりの何かし一時どのハ」とあるのでも明らかである。

(注7) 島居潜先生「片岡旨恕」(国語国文・昭和29年7月号所載)参照。

(注8) 注1、126頁。

(注9) 「太郎五百韻」解説(定本西鶴全集第十三巻136頁。)

(注10) 延宝四年刊『岳西惟中吟 西山梅翁判 千首韻』の巻頭に、有名な宗因の「莊子像賛」が載せられているが、むしろこれは惟中がここに利用したまでであつて、本書の序として替かれたものではない。

(注11) 『俳諧大辞典』参照。

(注12) 他に惟中が親交をもったとみられる大阪の先盟俳人の中に「藤原貞因」がある。太郎次郎五百韻の中では、月次初会はじめ三度顔をみせ、その内一座は惟中との両吟であるばかりか、惟中の他の撰習にも共通して多くの句が収載されている。

(注13) 『俳諧大辞典』惟中の項。および島居先生「岡西惟中」(明治書院刊「俳句講座2」202頁)参照。

(注14) 注4、27頁下。ただし須原博士は「明暦初年、宗因が俳諧師一駒として漸く活動し始めた頃、同時に西鶴もその門に入ったものであると考へたい。」(俳諧史の研究28頁)とされている。

(注15) 注4「俳諧太平記」27頁。

(注16) 注4参照。

(注17) 注9参照。

(注18) 『西鶴年譜考証』82頁参照。

(注19) 注18、66頁。「俳諧太平記」29頁にも、同題旨の文章あり参照。

(注20) 注1、120頁参照。

(注21) たとえば惟中じしん「梅翁の好みし句体のかるさ……」

(『統無名抄』)といい、また「大坂櫻林三日千句」(延宝六年五月刊)友雪自序に、「極楽は西山の翁の引導を以かる口の跡絶す」とある。なお、『西鶴研究六』所載尾形仿先生「怪口の俳諧(序説)」参照。

(注22) 注1、96頁および119頁参照。